

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

平成 27 年度第 2 回研究会

International Workshop:

Court, Literature and Power in the Early Modern Persianate World

日時：平成 28 年 1 月 11 日（月曜日）午後 2 時より 6 時

場所：東京外国語大学本郷サテライト 4 F セミナー室

共催：基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」

「中東イスラーム研究拠点」(MEIS)

報告 1

Naofumi Abe (The University of Tokyo)

“Poetics of Politics in Early Qajar Iran: Royal-commissioned *Tazkeres* at Fath-’Ali Shah’s Court”

阿部報告は、ガージャール朝ファトフ・アリー・シャー期(1797–1834)の宮廷と詩人の関係を、権力関係から読み解くものであった。ファトフ・アリー・シャーは文人・詩人を積極的に保護し、ガズナ朝のマフムード（位 998–1030）の宮廷を模倣していた。詩人伝もこの時代盛んに編纂されたが、特に *Zīnat al-Madā’eh* や *Anjoman-e Khāqān* などの君主の命を受けて編纂された勅撰詩人伝には、君主と宮廷詩人の双方の思惑が透けて見える。君主の側は、自らを文学と一体化することで自らの正統性を担保したいと考えた。これに対して、宮廷詩人の側は、宮廷文壇を強化し、在野の詩人に対して優位に立ちたいという意志を持っていたのである。

詩人伝は第一に文学史の研究によく用いられる文献であり、背景となる「文芸復帰運動」はこれまで単に文学史上の出来事だと考えられてきた。その背景に権力関係を見る阿部報告は、その解釈に疑問点がないわけではないが、ガージャール朝史の研究に新たな視点を加えるものであった。

報告 2

Sunil Sharma (Boston University)

“Representing Mughal Decline in Safavid Court Literature”

シャルマー報告は、1649 年にサファヴィー朝がムガル朝からカンダハールを奪回した事件をめぐる文学的言説を分析したものであった。当時きわめて稀な軍事的成功は、サファヴィー朝宮廷に集う文人のインスピレーションを刺激し、サーイブ・タブリーズィー（1677 年没）、ヴァヒード・カズヴィーニー（1694 年没）らが、サファヴィー朝の勝利を祝うとともに、ムガル朝の衰退について言及した詩を詠んだ。二つの王朝の力関係を象徴したさま

ざまな詩が紹介され、その意味内容が分析された。

歴史研究では必ずしも重視されていない事件について、これほど多くの作品が生まれたこと自体、貴重な指摘であり、興味深い。質疑では、ムガル朝の衰退の実相についての質問があり、少なくとも文学史では、アウラングゼーブ期（1658－1709）における衰退は顕著であるという回答が得られた。17世紀後半以降の両帝国の関係をどのように考えるべきか、重要な問題提起をなす報告であった。

（文責：近藤 信彰）